

会議報告書	
会議名	令和3年度 草津市立教育研究所 第1回運営委員会
日時	令和3年6月18日（金） 午後3時30分から午後4時45分まで
場所	草津市立教育研究所 2階研修室
出席者	委員：6名 高井 育夫 、 辻 大吾 、 橋本 篤典 、 高木 洋司 、 山本 忍 、 宇野 その子 教育研究所：9名 所 長：藤井 泰三 副参事：恒松 睦美 指導主事：奥村 真也 研究員：陌間 智 指導員：中谷 仁彦 、 西澤 留美子 、 西村 奈那子 スキルアップアドバイザー：山崎 賢 、 仲野 忠克
欠席者	委員：3名 糸乗 前 、 森 登世美 、 竹内 美和子
運営委員会の関連資料	<input checked="" type="checkbox"/> 有（別添のとおり） <input type="checkbox"/> 無
記録作成者	草津市立教育研究所 研究員 陌間 智

所長：ただ今より、令和3年度草津市立教育研究所第1回運営委員会を始めます。開会にあたりまして、一言ご挨拶を申し上げます。

日頃は、本市教育の振興に格別のご支援、ご理解をいただき、誠にありがとうございます。本日、教育研究所 運営委員会を開催いたしましたところ、みなさま御多用にもかかわらず、御出席いただきまして誠にありがとうございます。昨年度は、研究所も学校同様予定していた事業が変更、延期、中止を余儀なくされ、二転三転する事業の対応に追われながらの1年でした。しかしその一方でそれぞれの事業運営を見直すきっかけにもなり、with コロナでの在り方を考えました。この後、研究所の事業概要については詳細を説明いたしますが、大まかに申し上げますと（1）教育に関する調査・研究（2）不登校児童生徒等への教育相談業務（3）教職員を対象とした各種研修業務 の3点となります。

本年度当研究所は「学び続ける教職員への支援、不登校等学校不適應児童生徒への充実」を合言葉にスタートしました。しかしながら今年度もいわゆる with コロナは変わらず、厳しい状況が続いております。昨年度の経験を生かしながら、さらなる改善を加えて取り組んでいきたいと考えております。今年度の教育研究所の事業や取組が一層有効かつ実効的なものになり、本市の教育がますます充実・発展いたしますよう、運営委員の皆様からの忌憚のない御意見をお願い申しあげ、開会にあたりましての御挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

本運営委員会ですが、傍聴席が設けられますことと、会議の内容が草津市ホームページで公開されますことをご了解ください。次に自己紹介に入ります。

藤井所長・恒松副参事・奥村指導主事・陌間研究員
適應指導教室担当…中谷指導員・西澤指導員・西村指導員

スキルアップアドバイザー…山崎先生・仲野先生（ICT 担当）

本日は鈴木信之と清水康行が欠席させていただいております。また不在ですが、児童生徒支援課との兼務で湯浅専門員がおります。なお西澤指導員はこの後、事務所で電話・接客対応のため退室させていただきます。御了承ください。

次に、本日お集まりいただきました、運営委員の皆様方の自己紹介をよろしく願いいたします。高井委員様から右回りをお願いいたします。

高井委員、辻委員、山本委員、宇野委員、橋本委員、高木委員

研究所： 本日は糸乗前様と森登世美様、竹内美和子様が御欠席となります。よろしくお願いいたします。

所長： この後の進行ですが、資料の16ページをご覧ください。草津市立教育研究所規則を掲載しております。第7条に運営委員会の組織に関する記載がございます。3という項目に「運営委員会に、会長及び副会長をそれぞれ1人置き、委員の互選により選出する」とあります。これに則り、会長、副会長の選出をお願いしたいと存じます。どのようにさせていただいたらよろしいでしょうか。

委員： 事務局のお考えはありますか？

所長： それでは事務局案でございますが、会長には、平成30年度より運営委員を務めていただいております、前年度の会長でもある糸乗委員に引き続きお願いしたいと考えております。先日、欠席のご連絡をいただいた折、その旨をお伝えしたところ、本日のお集りの委員でご意見が出なければと内諾をいただいております。また、副会長には、校長会の代表としてお越しいただいております高井委員という案でいかがでしょうか。ご賛同いただけるなら、挙手をお願いします。

委員全員が挙手

挙手多数ですので、会長を糸乗前委員、副会長を高井育夫委員にお願いをします。では、これより規則第7条第4により、糸乗会長に議長として議事進行をお願いするところですが、本日はご欠席ですので、高井副会長をお願いいたします。席のご移動をお願いします。

高井副会長 議事席へ移動

副会長： 円滑な議事進行にご協力をお願いします。会に先立ちまして、本日の運営委員の出席状況を教えてくださいませんか。

研究所： 6名です。なお、糸乗委員様・森委員様・竹内委員様からは、本日欠席のご連絡をいただいております。

副会長： 6名は運営委員10名の半数を超えていますので本運営委員会は成立します。それでは、本会の次第4、今年度の事業概要の説明を事務局よりお願いします。なお、

①から⑤までの項がありますが、すべて一括の説明をお願いします。

令和3年度事業概要について担当者より説明

※別添資料(1)(2)に沿って説明

- ① 研究所の事業概要および研修事業(指導主事)
- ② 調査研究に関する事業(研究員)
- ③ 教育相談に関する事業およびやまびこ適応教室について(指導主事)
- ④ スキルアップ事業(指導主事)
- ⑤ その他(指導主事)

副会長： ありがとうございます。それでは、これより質疑に入ります。どなたからでも結構ですので、御質問、御意見、御感想等、合わせてお願いします。

委員： 2年目でゆっくりと落ち着いて聞けました。草津市は教育に取り組む姿勢がとても前向きですばらしいと思います。全国的にもレベルが高いのかなと感じております。さて皆さんご存じかもしれませんが、京都新聞の読者の声に14歳の子どもが次のような記事を投稿していました。

「タブレット授業、僕は不安。4月から全国の小中学校にタブレット端末が一人一台配布され、様々な場面でデジタル機器を活用した学習が始まった。僕の学校でも早速、教科の授業や学級活動、総合的な学習の時間で使用した。デジタル機器を活用することでペーパーレスが進んだり、生徒間での意見交流がスムーズに行われたりするので、学習の幅を広げる可能性を秘めていると思う。実際に使用してみて感じたことがある。僕はスマホを持っていないのでタブレットの使い方が分からない。これまで普通に受けられていた授業も、タブレットを思うように扱えずかえって混乱することがある。このまま使用を続けていくと、タブレットを扱う技量によって学力に差が生まれるのではないかと不安になった。使い慣れていくことが必要かも知れないが、タブレットの使用自体が目的ではないはずなので、使用に大きな不安を感じている僕のような人がいることを知って授業での利用を考えてほしい。」

これは、子どもの声として投稿されたものの一部です。でも草津市は小学校の低学年から Pepper に触れるなど早く導入されているので、不安を持っている子が少ないと思うのですが、草津市でも不安に思っている子がいるのでしょうか。また、知り合いの子で A 高校に入った子がいるのですが、家庭の方針でスマホを買ってもらえなかった。その子が高校に入って、コロナになってオンライン授業に変わったらと不安に思っている。子どもたちはコロナになって不安が増していると思います。そういう不安な子をどう勇気づけることができるのか、と思っているのです。

副会長： 昨年度まで学校政策推進課におられた辻先生、どうですか。

委員： 草津市では、平成27年に3人に一台タブレットが入りました。草津市の子どもたちが持っている ICT 機器に関するスキルはつながっている部分が多いと思います。困っている子がいないという確証はありませんが、先ほどの投稿者みたいな声をもっている子どもたちが取り残されないような協働学習を実施したり、その子を置いてきぼりにしないような学年集団や学級集団を作ってきたりしていると思っています。子どもたち同

士で教え合いしながらお互いに引き上げていく素地ができていると思います。逆に教員の方が、心配です。自治体によって、市町によって ICT 環境が整備されていなかったところがあり、そこから転勤されてきた先生の方が大変だと思います。ICT 機器を活用して授業をやっていかなければなりませんので、その力を市教委や研究所で引き上げていただいているところだと思います。

委員 : 草津市はレベルが高くて素晴らしいと常々思っています。私の孫が中学2年生になりました。とてもタブレットに興味があり、プログラミングにも父親よりも興味があり、1万円もするような本を買って勉強している。普通の本はあまり読まなかったのに、自分で前向きに目標をもって取り組んでいるので、どんどん伸びてきている。大人が教えてもらっている感じになっている。学校でも子どもたちの方が優秀になっていくことがあるのかと思います。そして先生方は舵取りをして、子どもたちの成長を促していく、そういう役割に変わってきているなと思いました。昔は教壇に立って上から教える感じでしたが、今は子どもたちと一緒に学びながら力を植え付けてどんどん伸ばしていく時代になってきたのだと感じています。

委員 : 私の所属している同推協、人推協についても草津・栗東・野洲・守山との交流が多いです。4市で交流しているときに、草津市は「良い」けど「いや」とも言われる。草津市では「やっていけない」、「ついていけない」という声を聞きます。これらに対しては教育委員会はじめ研究所で対応されることだと思います。今対策について聞きましたが、それなりの工夫をされていると思います。次に長期化するコロナ禍の中で、研究所でも普段よりいいものを編み出しているのではないかと思うのですが、それを聞かせてほしい。コロナ禍の影響は大きいと思いますがプラス面もあると思います。キラリエの人権センターでは、「追い風と向かい風がある」と言っています。集まらないから向かい風です。ところが人権問題を自分事として考える機会が多いから、かえって追い風やでと言っています。みんなに考えてもらう丁度よい風が吹いているというように捉えて進めようとしています。研究所ではどうなのか、プラス面を教えてください。

副会長 : まず他市町から草津市に転勤されてきた教員の困り感、ICT に関する部分について研究所からお話いただきます。

研究所 : 自己啓発講座が本来そのような先生方のサポートになるとよかったです。今年度は学校政策推進課でタブレット導入のことをしてくださっています。他市町からこられた若い先生方向けに共催で研修をと考えていたのですが、日程が合わなかったため、学校政策推進課独自で研修講座を行っておられます。学校現場では、小学校で言いますと同じ学年間で、中学校では同じ教科担当間での交流があると思います。その中で教師同士の学び合いをされていると感じています。

委員 : 昨年度まで学校政策推進課におりましたのでお話しします。情報化推進リーダーという各学校の ICT 環境を推進する先生が集まり、最新の ICT スキルを学んで、それを学校の中で広めていくこともされています。今の状況で言いますと、GIGA スクール構想で一人一台のタブレット端末が入ってくる時代になりましたので、その端末を教員が活用して授業を進めていかなければなりません。これからは筆箱やお道具箱などと同じように「引き出しの中からタブレット端末を出して」という時代になってきている。市町関

係なく必要な力になってきていると思います。

研究所： スキルアップアドバイザーで中学校を回っていると、他市町から来られて ICT 活用に不安を感じておられる先生を対象の先生として当てておられることもあります。実際にその先生方の話を聞いたり、夏には対象の先生だけを集めて学校政策推進課と協力しながら ICT の使い方の講座を開いたりする予定です。その中で具体的な活用方法を研修しています。校内でも、OJT という共同体を作って先輩教員の授業を見る研修をしています。お互いの授業を見る機会がなかなかないのですが、その授業の中で ICT の効果的な活用方法について学ぶことのできる、よい機会となっています。

また ICT スキルアップアドバイザーは、ICT を活用する授業を行う学校へ行って、そのクラスの授業をサポートしたり、TT (ティームティーチング) として説明したりしています。学校には、すごく堪能な先生と毎年のように新しく入ってくる先生や他市町から来る先生がおられるという状況ですので、研究所と学校政策推進課と色々なサポート体制を組んでいます。そのようにして、子どもたちに影響が出ないようにしています。

研究所： 教室でタブレットを使うのに困っている子どもがいるとすると、周りの子がそれに気づいて、子ども同士で教え合っている姿が見られます。子ども同士の学ぶ力がすごいなと思っています。それを見ている教職員同士も学び合いができるような研修ができればと思っています。私は、学校政策推進課の研修にもついて行き、先生方が早く使いこなせるようにサポートをさせてもらっています。

副会長： ありがとうございます。ほかにありませんか。

委員： やまびこ教育相談室に関心があります。コロナ禍になって心の悩みや不登校の人数は増えているのでしょうか？

研究所： 人数としてはそんなに大きな変化はありません。ただ気になるのは、小学校の低学年ぐらいから学校に行きづらかったり行き渋ったりする子が多いことです。相談でも小学校段階の保護者の方からの相談が増えていると思います。

委員： その子たちは発達障がいだからという理由がありますか。

研究所： いろいろなケースがありますので、それだけで特定することはできません。いろいろな要因があり、その要因の一つとして特性がある子どももいます。また成育歴も含めた背景を見ていくといろいろなことが分かってきますが、これだと特定する要因にはなりません。複合的な要因がたくさんあります。また総じて、共同生活・集団での生活に対しても不適應です。それが家庭や就学前の過ごし方と小学校1年生、いわゆる学齢期に入るところへのなめらかな接続が、いろんな要因があって昔のようにいかないのかなと感じています。実数として増えているのは、そういうケースです。

委員： それはコロナ禍の前と比較して、低学年が増えているということですか？

研究所： ここ2、3年で特に感じています。

委員： マスクをして生活していることで、影響があるともいわれていますが…

研究所： コロナの影響がないかと尋ねられたら、どこかにはあると思います。子どもの生活にも行動制限が出てきますし、家庭の在り様が追い風になる部分と向かい風になる部分があると思います。子どもの居場所も含めて。子どもが悩んだり学校に対して不適應を起こしたりする要因の一つにはなっているかとは思いますが、それが低学年の子が増えた

全ての原因だとは言えません。

委員 : 今何人ぐらいおられますか

研究所 : 適応指導教室に通っている子どもは、5月末現在16人。昨年度の7人と比べると倍増しています。ただ、昨年度は2か月間休校だったので、学校が始まって2か月後ぐらいの昨年度の7月と比べています。その比較をしてみると相談件数はあまり変わらないのですが、適応指導教室に在籍している子どもは倍以上です。継続も新規もあります。

委員 : コロナが日本中、世界中に影響することで、大人も鬱になるなどして会社に行けない人が増えています。また会話が大事な成長期なのに、在宅で仕事している父親に話しかけられないとか、母親は朝・昼・晩ご飯の用意をするためにバタバタしている。また学校へ行けば給食は前を向いて黙って食べなければならない状況がある。登下校の時は本来の元気な子どもの姿を見受けられるのですが、家や学校の中の様子が分かりません。とにかくこのかわいそうな時代を乗り切ってほしいと思っています。

研究所 : この時代に適応している子どもたちが、失った経験やその時に味わうべき経験などが欠如してしまった分の代償は、何年後かに出てくると思います。放課後に遊ぶ約束もなかなかできませんし、部活動でも大会がなかったり先輩を後輩が送り出す思い出も削られたりしています。小さい子は味わうべきコミュニケーションが足りなかった2年間の代償は、どこかで出てくると思います。日々接している子どもたちを見ると、長い目で見ていかなければならないと感じています。先ほどの話ですが、家庭でも単身赴任だった父親が家に帰ってきて自宅で仕事をされると、家庭の状況が変わり、子どもと親との関係が変わってきている。そういうケースが通室している子どもの中にもあり、大人スタイルの変化で子どもが大きな影響を受けていると感じています。各ケースを見てみると、それがいい影響を与えることもあるのですが、逆によかった関係が近くになりすぎて嫌になってしまうようなパターンもあります。指導員の先生方が日々、遊びや関わり・普段の会話から子どもたちが何を感じているのかを聞いたり相談を受けたりしてくださっています。

委員 : やまびこの存在がとても大事になってきますね。

研究所 : 通室者が増えていることばかり言いましたが、3月まで行けなかった子が4月から教室復帰できている子もいます。また4月に入って始めは自信なさげだったのですが、ほとんど学校に行けるようになり、やまびこを修了した子もいます。そのように居場所として、ここを活用しながら学校に復帰した子もいることをお知りおきください。

副会長 : コロナ禍で研究所として工夫したこと、追い風にしたことはありますか。

研究所 : 夏期研修講座です。今年度はハイブリッド型で行う予定ですが、昨年度は実際の講師を招いて集まってする研修ができませんでした。そこで何とかできないかと考えたNITS（独立行政法人教職員支援機構）のオンライン研修です。遠方におられたり人気があって呼べなかったりする講師の先生がおられるのですが、そのような名だたる教授や文科省の調査官が20分間程度で解説されている動画が100近く収められているサイトです。その中から自分の課題に沿った動画を選んで視聴するオンライン研修を行いました。いつでもどこでも見られたり、くり返し見られたりすることが好評でした。また普段は参加しにくかったテーマの動画も視聴したという人もおり、来年度もこの形でしてほし

いという感想も多くありました。その反面、対面で話を聞いて質問する場所がほしかったという感想もありました。そこで、今年度は人数を絞るのですが、実際の講師と対面で質問しながら研修するということと、オンラインの研修の両方を考えています。LGBTの内容などオンライン動画の内容が追加されており、併用という形で研修できればと考えております。

研究所： コロナ禍の影響を考慮して、令和3年度の研修をどうしていくかを改めて考える機会になりました。再度研修の意義を考えたり、現場の先生方や研修をしてくださる側の講師の先生方の意見を聞かせてもらったりしながら研修を組み直す機会になりました。例年、草津市では900人から1000人ぐらいの先生方が研究所の講座に参加してくださっています。たくさんの先生方に研修の機会をもつていただくことに意義があることには間違いがなく、いろんな経験年数の先生がおられることも学びにはなります。しかし現在、職員構成にばらつきがあり中間層がない現場の状況を考えると、いかにミドルリーダーを育てていくかが重要です。そこで今年度は、大人数を集められないという大前提で、ターゲットを絞り、絞った人数でねらいに応じた研修を行う予定です。リーダーとなる先生に研修を受けていただき、各校で広めてもらおうと思います。そして今年の良い所は来年引き続き行い、やはりもっと沢山の人の聞いてもらわないといけないということであれば間口を広げて行うなど、after コロナも考えていかなければと思っています。

副会長： 山本委員、どうでしょうか

委員： 今年度から学習評価の形が変わっていると思います。評価に値する成果が見えにくい子への支援に苦労されていると思うのですが、そのあたりはどうでしょうか？

地域協働合校で去年できなかった田植えとか野菜の収穫など見に行かせてもらいました。先生方の工夫がされていて、子どもたちも限られた中で楽しく体験ができてよかったなと思っています。また中学校では合唱コンクールをされていて、いつもより短期間で一生懸命に練習し、マスクをしながら歌う頑張りを見させていただきました。子どもたちも頑張っているし、それを支える先生方のご苦労に頭が下がる思いです。

研究所： 中学校も新指導要領になり今年度から3観点の評価になりました。小学校では昨年度から3観点評価が始まっています。どちらも学校でたくさん研修をされていると思います。評価の仕方、見取りの仕方自体が変わっているということで、教科主任を中心に研修を行い、評価の仕方について話し合っていると思います。また、今までのように1時間ごとではなく、単元全体のまとまりで評価を考えようという動きになっています。単元全体でどのような学びをしているのかを大事にしています。夏季研修のオンライン動画の中にも新しい評価に関するものがあります。

研究所： 夏期研修講座の7番、学力向上に関する水戸部修治先生は、「授業と評価の一体化」というテーマでご講演いただきます。この講座の構成についてはいろいろ考えさせていただきました。昨年度、この運営委員会で「ICT活用が進んでいるけど、情報モラルの部分が心配です。」というご意見もいただいたので、10番の講座はタブレットの使い方というよりも情報モラルという内容で行う予定です。

副会長： 橋本委員は、どうですか

委員：一番はじめに子どもに接する仕事をさせていただいているのですが、少し気になることがありました。今年の卒園児の保護者で「何がわからないかわからない」とおっしゃる方がおられました。コロナ禍で子どもも非常に不安になって、週に1回母親と一緒に園に戻ってくる子どもがいます。その子は毎週金曜日に来て気持ちを切り替えて、また月曜日から小学校に行っています。そんな子もいますが、コロナ禍で悪いことばかりではないと思います。新聞か何かで読んだのですが「正しいという字は一に止まると書く。正しいことをしようと思う時には一旦停止するという意味が、正しいという字の語源にある。」と。これを読んで、確かに大人の社会でも「これは必要なかったな」と思うことがあったと思います。私も会議が減って、現場にいる時間が増えました。次にこれは小学校も一緒だと思うのですが、保育園・こども園においては支援が必要な子がどんどん増えています。毎年増えていっている中で、どうしていったらいいか、いつも考えています。うちの園が認可保育園になって17年目になるのですが、小学校に入学して、保育園・こども園に戻りたいという子がたくさんいたのです。これではだめだと思いました。私もアクティブ・ラーニングに関しては大事だと思っているのですが、その前段で私たちは何ができるかを考えて、新しいメソッドを取り入れました。完全に保育を変えてみました。それをもって何とか小学校で45分座ってられる子どもを育てようとしています。その1期生が昨年度卒園しました。今までの子とはかなり違います。園もがんばっているのですが、小学校で進めている新草津型アクティブ・ラーニングについて教えてほしいです。また、道徳の授業が60年ぶりに科目になったことに興味をもっているのですが、成績をどのようにつけておられるのかが気になります。それを説明していただきたいです。

研究所：スキルアップの中でも、新草津型アクティブ・ラーニングと言われているので対象の先生に話をしています。今までの草津型アクティブ・ラーニングの中では、「問題解決的な学習」をしましよとか、特別な支援の必要な子どもでもわかるようなスタンダードな「ユニバーサルデザイン型の学習形態」、さらに「ICTを活用」しましよと進めてきました。今年度からNewとついたのは、GIGAスクール構想で一人一台端末が導入され、日常的に文房具のようにタブレット端末を使うことになったからです。また学習を1時間1時間ではなく単元全体で、何を指すのか見通しをもった学習を計画していくことを中心に行っています。

委員：道徳の成績というのは、小学校の道徳は成績をつけるというより、その子の学びの様子や学びで何を得たのかについて、学習で使う道徳ノートを基にして所見を書いています。教科化されて何が変わったかという、大きくは変わってはいません。少なくとも年間カリキュラムをしっかりとやることができます。

委員：中学校も一緒です。

副会長：時間が押してしまいました。もう質問はよろしいでしょうか。

では、令和3年度の事業の説明をしていただきました。①から⑤までを承認いただきたいということでございます。ご承認いただける方は挙手をお願いします。

委員全員が挙手

ありがとうございます。全員ご賛同いただけましたので、承認とさせていただきます。皆様のご協力により活発な討議になりました。ありがとうございました。これで司会を下ろさせていただきます。

所長 : ありがとうございます。では、連絡事項にうつりたいと思います。

研究所 : まず「研究所だより」についてです。研究所より各学校の取組や教育に関する情報、研究所からの情報発信を目的に、年数回発行をしております。今年度も4回の発行を計画しております。今後も運営委員のみなさまにもお届けさせていただきますので、ぜひご覧ください。

次回、第2回の運営委員会は、令和4年2月4日金曜日の午後3時30分より予定しております。ご予定のほどよろしく申し上げます。

所長 : では、ここで閉会のあいさつをさせていただきます。

本日はご多用の中、第1回運営委員会にご出席くださり、慎重審議の上、ご承認いただきありがとうございました。本年度の運営に様々な角度からご意見をいただきましたことを真摯に受け止め、事業の推進に当たりたいと考えております。今後とも、ご支援・ご協力の程よろしく願い申し上げまして、ご挨拶といたします。本日は、ありがとうございました。これで閉会となります。どうぞ、お気をつけてお帰りください。